

終戦の和平工作と政治犯釈放のころ

——山崎早市氏に聞く（2・完）

吉田 健二

はじめに

- 1 第一高等学校に学ぶ
- 2 産労へ入る
- 3 全協・日本出版のオルグ（以上、前号）
- 4 同盟通信社へ入社——和平工作に従事（以下、本号）
- 5 政治犯の釈放

4 同盟通信社へ入社——和平工作に従事

検挙——釈放

山崎 私は1937（昭和12）年12月15日に、第1次人民戦線事件で検挙された。高津正道を立てて設立した、全日本出版労働者協会が治安維持法に違反するという容疑だった。協会は、出版工クラブの神田支部を主体に設立し、慎重に合法領域における活動をしていましたが、見通しが甘かった。

第1次人民戦線事件は、合法左翼をねらい撃ちしたものだった。当局は鈴木茂三郎さんの日本無産党や、加藤勘十さんら全評関係者の幹部を根こそぎ検挙した。この検挙で事実上、日本における人民戦線運動の拠点が潰され、合法左翼の運動は終息した。

—— 1938年2月に、大内兵衛、有沢広巳先生など労農派の学者も検挙されていますね。

山崎 ええ。1938年2月の全国一斉検挙は、第2次人民戦線事件と呼ばれているようです。

とにかく凄まじい弾圧の嵐だった。先に日本共産党や全協を潰しておいて、次に合法左翼の連中や労農派系の学者を検挙した。実に用意周到な検挙だった。人民戦線事件をへて生活も街の風景も一変した。私は1938年秋に釈放されたが、窮屈で息が詰まる生活が始まった。

—— 「街の風景が一変した」とは、どういうことですか。

山崎 戦時色がいちだんと濃くなったということです。国家総動員法が公布され、国民精神作興運動や産報運動が唱えられた。戦争に協力しない国民を「非国民」と呼ぶようになった。誰もが息苦しくなった。

左翼活動をおこなう余地などまったく無くなりました。あるのは右翼やファッション系の運動、あるいは愛国婦人会、国防婦人会など官製の国民運動であった。かろうじて残っていた労働組合も、産報運動という生産力増強をめざす国策協力運動で組織の存続を図ろうとしていた。

特高の監視の目が工場や職場に張り巡らされたもとので、自主的な活動などできやしない。私

はひとまず左翼の活動を中止し、仕事を持つと同盟通信社に勤めていた友人を訪ねて相談した。

—— 安達鶴太郎さんですか。

山崎 安達じゃない。同盟には第一高等学校のとき寮で同室となった友人や社研のメンバーが何人も勤めていた。また朝日新聞社（東京本社）に、社研のメンバーで同期だった土屋清が論説委員補佐（のち論説委員）として勤めていたので彼にも相談した。

土屋からは、企画院が研究プロジェクトに従事する調査官を募集しているので応募したらどうかと提案された。土屋自身、企画院の国策関係の研究会に有識者として参加していた。魅力的な提案だったが、官庁であり、第一高等学校除籍という経歴を考えると躊躇された。

同盟通信社へ入社

山崎 就職活動の最中に、急きょ実家の機械工場を経営しなければならない事態となった。機械工場は、親戚の連中が親父の資産を引き出して設立したもので、折からの軍需景気のなかで笑うほど儲かったときもあったが、おシャカも出て経営はとんとんだった。

私は会社経営に興味を持てず、満たされない日々がつづいた。そんな時に高等学校の同期だった友人が、同盟が、機械工業の実情や統制経済の問題に強い専門家を募集しているという、願ってもない情報を知らせてくれた。私は応募し面接のみで合格した。

—— ペーパー試験はなかったのですか。

山崎 試験は無かった。けれども編集局、経済局、総務局の各局長の面接を受け、私は採用された。嬉しかったですね。私の記者生活が始まりました。1941年9月のことです。

同盟通信社は当時、ナショナル・ニュース・エージェンシーとしての膨張期にあって、1年

に100人、200人という単位で社員が増えていた。海外局でも大規模に、また支局でも現地採用があった。だから事業拡大に伴う中途採用は日常的だった。とくに編集局や、安達鶴太郎が企画部長だった海外局に中途採用が多かった。

もちろん学卒者の定期採用試験もありました。戦争の拡大に伴ってニュース需要が高まり、通信網も整備・拡張され、また情報を分析するエキスパートも必要になってきたのです。私を推薦した友人は、社研のメンバーで、東京帝大へ進学したけれども在学中に検挙された経歴をもっていた。

—— どなたです？

山崎 名前を言うのは控えたい。彼の同盟入社は語り草になっていた。彼は古野伊之助社長を口説いて入った唯一の社員だった。彼が得意げにそう言っていた。彼は毎朝5時半、古野社長の自宅玄関に立って入社する社長に「お早うございます」と連呼していた。夜は夜で帰宅を待ち伏せして古野社長に「お帰りなさい、お疲れ様です」と連呼した。

古野社長は無視していたが、彼の挨拶は毎日の行事となっていて、声も大きく世間体もあって困っていた。社長は熱心なヤツだと半ば根負けするような形で入社を決めたという。また社長は彼の気持ちが本物かを試したのでしょね、入社に際して「ただし任地は上海支局だよ」と命じた。

彼の上海赴任は破天荒だった。通常、上海への赴任は神戸航路です。けれども彼は東京駅を出発し、対馬海峡を越えていったん朝鮮に腰を下ろしてソウル周辺をくまなく見聞した。そして、朝鮮からは中国・大連を、また満州を周遊して北京に到着し、さらに徐州に立ち寄りなどして任地の上海へ着任した。赴任までの期間は3か月。この期間の交通費と経費を「古野社長の特命赴任」として上海支局に負担させた。

—— 豪傑ですね。

山崎 これを豪傑というのかね。常軌を逸していると思いませんか。3か月もかけて任地に赴任するなんて……。けれども上海支局に赴任してからの彼の取材には目を見張るものがあったという。

経済記者として活躍

山崎 私は1941年9月30日に入社し、経済局内国経済部（内経）に配属された。社員試用で入社し、職名は記者だった。経済局は内経と外経の2部で構成され、配属に際して、石部幸式局長から統制団体や統制経済の問題を最重視して取材・調査してくれと念を押された。

—— 給与はどれほどでしたか。

山崎 本俸は100円で、ほかにかなりの手当がついた。1938（昭和13）年4月、第1次近衛文磨内閣のもとで国家総動員法が公布された。これ以降、日本は統制経済の時代に入りますね。重産協（重要産業統制団体協議会）が設立され、物資、生産、価格、労務を含む経済の一切が統制された。

入社当初、私の仕事は、統制団体の事業や、戦時経済の進行、またその途上に横たわる問題を取材して論点や解決方策に関して、レポートとしてこれをまとめることでした。だから私は毎日のように企画院、商工省、厚生省、内閣調査局などの官庁や、重産協、産業機械統制会などの団体を回って取材を重ね、また資料を収集していました。

これは余談です。私に何冊か著書があります。その一つに『生産増強の方策』（霞ヶ関書房、1943年）と題したものがあります。

この本は、生産増強に関して、生産体制、統制団体、生産増強の方策、技術、経営、勤労、賃金などの問題に関して、郷古潔、松前重義、大河内正敏、美濃部洋次、相川春喜ら13名が寄

稿し、私が編集責任者としてまとめたものでした。私も書きました。また執筆者は全員、私が取材した方でした。

私の編著『生産増強の方策』は、付録として「生産増強に関する資料」を収めています。これは統制経済や生産増強の方策に関する基本資料を収録したもので、各界で話題になり、本もよく売れました。

古野伊之助社長について

山崎 私は入社しても古野社長に挨拶していない。古野社長はとてつもなく偉い人だった。古野社長は、東条英機首相に直接、進言する立場にあった。古野さんは1939年に社長となって2年くらいで、自前でアジア全域をカバーする情報網を形成した方です。私は一兵卒で、支社雇いを含め2千数百人余の社員の一人にすぎない。

私が古野社長と口を利いたのは2回だけです。1回目は特派員として短期赴任したラングーン支局から本社に異動となって、ビルマ派遣軍の喜田少将から「古野社長によろしく伝えてくれないか」と頼まれたとき、2回目は編集局で直接、古野社長から声をかけられたときです。

—— どのような用件で？

山崎 用件ではない。同盟の編集局は日比谷公園の市政会館の地下1階のフロアーを占めていた。幹部連中はそのど真ん中に机を置いて執務していた。日本の敗戦が決まって1週間ほどしたある日、幹部連中の机近くを通ったら、古野社長から「おいアカ、これからはお前らの時代だな」と声をかけられた。

—— 古野社長の掛け声は「新時代が到来した。これからも頑張れよ」といった意味でなされたのでしょうか。

山崎 （笑）わかりませんね。なによりも私

の素性がばれていたのに仰天した。また「お前らの時代だな」という古野社長の言葉をどう受け止めていいのかわからなかった。私は「えっ」とか「はいっ」とか言って一礼してその場を離れた。

脱線しますね。古野さんという人はほんとうに偉い人だったらしい。私は古野社長に対して「国家を背負う通信人」「通信・情報界の大御所」といったイメージで眺めていました。

事実、同盟は1936年に新聞聯合社と日本電報通信社が合併して、ナショナル・ニュース・エージェンシーとして誕生しましたが、新聞聯合社の総支配人としてこれを仕切ったのは古野さんだった。

古野社長が偉いというのは、時局の要請に対応し、剛腕をもって両社を合併に導いて同盟通信社を誕生させたからというのではない。

話はもっと昔のことです。古野社長は新聞聯合社以前、UP系の国際通信社の北京支局長だった。1920、21年ころです。その国際通信社の北京支局で古野さんは、風見章、市川正一と机を並べて仕事をしていたという。この3人のなかで古野さんが最左翼だった。赴任中、古野さんは北京市民の列強の帝国主義支配に反対する集会にも参加して「植民地支配反対」「帝国主義戦争反対」を叫び、日本の憲兵に追いかけていたというのですね。

—— 最左翼といえば、のちに日本共産党の幹部となった市川正一さんではないのですか。

山崎 誰もがそう思うでしょうね。事実は違う。北京支局長時代の古野さんを知っている古参社員から聞きましたが、古野さんが最左翼で、次に風見章、そして市川正一の順番だそうです。市川正一は早大時代に古野さんの後輩だったそうですよ。

—— 知りませんでした。

山崎 北京時代の古野さんが、風見章や市川

正一と机を並べて仕事をしていたとは実に面白い。風見は間もなく内地に戻って「信毎」（『信濃毎日新聞』）の主筆を務め、のち第1次近衛文磨内閣の書記官長に就任していますね。風見も古野さんも、市川正一も当初は体制内左翼だった。3人は尾崎秀実や西園寺公一とも交遊していたといいます。

関連して、このことも紹介しますね。編集局の政治部長を歴任され、私が入社したときは社長が統括する部署にいた長島又男さんは、安達より年輩で、左翼歴も長く、同盟内でも実力者と呼ばれていたもので、在職中は尊敬の念をもって付き合わせてもらっていた。長島さんは同盟において、風見章と直接連絡が取れる唯一の人だった。当然でしょう。長島さんは早大時代、風見章の1、2年後輩で昵懇の間柄だったので。

長島さんによれば、風見は、鋭敏で冷徹な受け答えをする人だったという。話が論理的で、飾りがなかったといいますね。話がどんなテーマだったかわからないけれども、口が重く、また質問があれば論点を整理してズバツと答える人だったが、言葉遣いは丁寧だったという。風見章を取材すると同盟の記者の誰もが劣等感を抱いたそうですよ。

終戦の和平工作——同盟グループ

山崎 「質問書」に書かれていませんが、この機会に、記者時代の一コマとして、鈴木貫太郎首相に終戦へ向けた和平工作を促した取り組みについて紹介したいと思います。よろしいでしょうか。

—— どうぞ。

山崎 1945年4月7日、小磯内閣に代わって、鈴木貫太郎内閣が誕生しました。鈴木貫太郎の伝記に、娘婿で、内閣書記官長を務めた迫水久常氏が編集代表でまとめた『鈴木貫太

郎傳』（伝記編纂委員会編、非売品、1961年）と、息子で、首相秘書官だった鈴木一氏がまとめた『鈴木貫太郎自伝』（時事通信社、1968年）があります。

私は、伝記が同盟グループの終戦に向けた和平工作をどう記述しているか大変気になって読みました。と言いますのは、私ら同盟グループが和平工作の対象とした重要人物の一人は迫水久常だったからです。

伝記は2つとも、鈴木貫太郎自身「戦時最終内閣」として、終戦工作に奮闘したと書いていました。

実は同盟において、1945年6月以降、古野伊之助社長や松本重治さんが直接、木戸内府（木戸幸一内大臣）と組んだ、終戦へ向けた和平への取り組みがありました。同盟において、私らのグループのほかにもう一つ、上層のレベルでも終戦に向けた和平工作があったのですね。

この事実は、戦争が終結したのち知りました。けれども先の2つの伝記は、私らのグループに関しても、古野社長らの和平工作に関しても言及していない。たぶん編さん委員会が、終戦の和平工作に関する個々の事例については書かない方針だったのでしょう。

—— 終戦の和平工作に関しては、もっと早く小磯国昭内閣の重光葵外相のもとに集った知識人グループ——安倍能成、小泉信三、田中耕太郎、天野貞祐らも、宮中や政府高官に働きかけていたようですが。

山崎 東京帝大の教授ら知識人の動きがあったことも、戦争が終わってから知りました。当時、戦争の早期終結をめざす和平工作は多方面でなされ、また働きかけた関係者も重なっていたと思いますね。だって戦争は日本に勝ち目がなく、誰もが国の大事を考えていたわけですからね。

美濃部洋次について

鈴木貫太郎首相に和平工作を促す取り組みは、1945年4月から8月初旬にかけて、きわめて慎重かつ秘密裏におこなわれた。きちんと盟約を結んだわけではなく、だからメンバーというほどでもないが、ここに核となった関係者をあげますと、安達鶴太郎、海野稔、私の3人です。

また働きかけた対象や接触を試みた人物は、鈴木貫太郎内閣の文相だった太田耕造、内閣書記官長の迫水久常、木戸内府の松平康昌秘書官長、軍需省軍需動員局長の美濃部洋次の各氏です。

私は入社以来、経済記者として、官庁回りを通じて美濃部洋次さんと懇意となった。当時、美濃部さんは革新官僚のホープと噂されていた。彼は、商工省総務局総務課長（兼・企画院調整官）をへて軍需省軍需動員局長に就任された方で、東条内閣の商相だった岸信介の片腕だった。当時、岸に会いたいなら美濃部を通せとも言われていた。

また美濃部洋次さんは、迫水久常とは、府立一中（現・都立日比谷高等学校）、第一高等学校、東京帝大法学部の独法科の同窓で2年先輩だった。2人は昵懇の間柄で、内閣の使命として和平終戦を推進することでも息が合っていた。

—— 美濃部洋次さんは美濃部達吉教授の甥だそうですね。

山崎 そうです。ちなみに彼は美濃部亮吉・元東京都知事とは従兄弟になります。また海野稔さんは日本法曹界の大御所・海野晋吉弁護士の甥にあたりますね。

私は同盟入社以来、美濃部洋次さんに引き立ててもらいました。美濃部さんの紹介や名刺があれば、商工省内はもちろんですが、他の官庁も、重産協や財界団体も容易に取材できました。また光栄なことに、私は美濃部さんから信頼さ

れ、国の大事を話し合う間柄となっていた。

当時、美濃部さんの親分の岸信介は、主戦派の東条英機一派と対立してうとまれ、憲兵の目が光っていた。けれども美濃部さんとは密かに連絡を取り合って話し合いを重ね、大東亜戦争においてほとんど勝ち目がないことで私たちは見解の一致をみていた。これは、私がラングーン特派員としてビルマ戦線を取材した見聞からも、美濃部さんにとっては軍需物資の供給・調達の責任者の立場で確定的に判断できました。

こうした判断から、私と美濃部さんは、日本がなすべき選択は連合国との和平終戦のほかかないこと、鈴木首相には終戦へ向けた和平工作を一日も早く決断してもらうべきこと、このことを堅く約束して励まし合いました。1945年4月上旬のことです。

「こんな戦争はやめろ！」

山崎 1945年4月のある日、私は同盟の広い編集局で、安達鶴太郎がすごい形相で「こんな戦争は止めろ！」と怒鳴っていたのを見た。安達は4月の人事で海外局企画部長に就任していた。局長は松本重治氏（常務理事）に代わって長谷川才次氏が就任した。

—— 長谷川才次氏は、時事通信社の社長をなさった方ですね。

山崎 そうです。同盟は1945年10月31日をもって解散した。そして翌11月1日に旧同盟を二分して共同、時事の通信社が誕生し、長谷川氏は時事の初代の社長となった。安達も時事に移籍し、初代の編集局長（政治部長兼任）に就任した。私も海野稔氏も時事に移籍した。

話を戻しましょう。同盟における対外報道や、提携する外国通信社からの入電及び同盟の対外網から入ってくる一切の情報は、海外局の外信部、情報部で集約・処理されたのち企画部で分析・整理し、「特別通信」といった形で会員社

に送られ、内閣や軍の統帥部にも報告された。

この海外局企画部の部長が安達だった。局長の長谷川さんや安達が、ポツダム宣言の放送や、日本降伏に対する連合国との交渉に関して、鈴木貫太郎内閣といかに密接に連絡を取り合っていたかは、長谷川才次氏の回顧「終戦前後一週間」（『太平』1946年1月号）に紹介されています。

さて、安達や井上勇氏は毎朝、各部の記者を集めて要点をかいつまんだレクチャーをしていた。1945年4月に始まった沖縄戦や、中国や南方の支局から刻々入ってくる戦況はまことに悲惨なもので、日本軍が勝てる見込みなど微塵もなかったわけだが、私はリアルタイムで状況を知った。

他方で、鈴木貫太郎首相は、終戦後1年ほどして『読売新聞』だったと思うが「私は組閣当日から戦争の終結をねらっていた」という趣旨の談話を発表しています。また先の『鈴木貫太郎自伝』でも「和戦を胸中に秘めて」組閣したと述べているが、当時そうした気配はオクビにも出さなかった。

むしろ実際はその反対で、鈴木貫太郎首相は、小磯内閣の方針を継いで陸軍の要求に沿う本土決戦のための施策を講じていた。事実、鈴木首相は1945年7月28日に、連合国のポツダム宣言の発表に「黙殺」を声明していますね。

戦局の推移のなかで、国民の間に「一億玉碎」の悲壮感を生む状況となっていた。同盟の編集局は日々重苦しい雰囲気となっていた。こんなときに安達が大声で「こんな戦争は止めろ！」と叫んだ。

—— 記者のみなさんは何と？

山崎 「おうー」とか「うー」とか言葉にならない反応だった。声をあげて同調する記者もなかった。編集局はいつもの慌ただしさになって、安達の叫びの余韻もかき消された。

密かに進む和平工作

山崎 私は、性格が穏やかな安達の叫びに仰天した。また彼の勇氣に感動し、次第に身体が熱くなった。私と安達は数日後、新橋の某所で落ち合い「和平密かに急ぐべし」で意見が一致した。

私は1945年4月、異動となって編集局の文部省詰めとなった。私は取材を重ねるうち、局長や、太田耕造文相とも気軽に話し合うことができるようになった。太田さんについては重厚清廉で、理想をもつ国士という印象を受けた。

当時、太田さんは支配層のなかでは、右翼の巨頭・平沼騏一郎派の重鎮だった。1939年1月4日、近衛内閣の総辞職を受けて、平沼内閣が誕生しましたね。太田さんは平沼内閣で内閣書記官長に就任した。

けれども平沼首相は8月28日、折から独ソ不可侵条約の締結に逢い、「国際情勢は複雑怪奇」うんぬんの声明を出して退陣した。平沼は間もなく枢密院議長に返り咲き、太田さんは野に止まった。鈴木貫太郎内閣における太田さんの文相就任は、平沼派を代表しての就任だったので。

私は太田さんが文相になって以来、記者会見が終わったちょっとした雑談の席で、また大臣室で、「救国日本」を実現するためには戦争終結へ向けた和平工作以外にないことを耳元で囁きつづけた。

—— 太田文相の反応は？

山崎 最初は「うん」とか「そうだね」とか、曖昧な返答に終始した。けれども太田さんは胸に含むというか、期するものがあつたようで「(和平は)大願だね」「成就すると良いが」と漏らすようになった。私は、太田さんが救国の和平終戦に傾いたとみた。

記者の取材はすべて「手帳」や「日報」に記される。けれども和平工作に関するメモは私の

「手帳」に一切記録されていない。扱いが厳秘であり、慎重を期したのでしょうね。

記憶を整理しますと、私は太田文相との接触から「脈がある」と読んで早速行動を起こした。まず私は、太田文相や美濃部洋次氏との話を逐一、安達に報告した。次に私は安達を美濃部氏に引き合わせる必要があると判断して、手順を踏み、彼を芝（港区）の美濃部氏の自宅に連れていった。

ここに、私らの同盟グループと美濃部洋次氏との連携が生まれた。以来私らは夜半に美濃部氏の邸宅で、日中も氏が指定する場所で情報交換を重ねた。

美濃部氏との接触はずいぶん難儀しました。当時、大臣はガソリン車に乗れたが、次官以下は木炭車で、急な坂は上る力がなかった。エンストも起きた。同盟に取材や幹部送迎用のガソリン車が何台もあり、部長以上はかなり自由に使うことができた。安達はそのガソリン車を使い、美濃部氏が指定する場所に乗り付け、あるいは彼を乗せて某所に向かい邸宅へも送迎していた。

鈴木・平沼両派の提携

山崎 太田文相に和平へ向けた決意を促して1か月ほどした1945年5月下旬か6月初旬、私は、太田さんの熱意を美濃部洋次氏に伝えた。彼は私の報告をかみしめて聞いていた。日本政治で隠然たる勢力を有する、右翼の本流＝純正右翼の平沼派が和平へ向け一歩動き出したことに美濃部さんはいたく喜んでおられました。

10日ほど経った6月中旬、美濃部氏は安達と私に「おかげで平沼派と連絡がとれた。有難う」と言った。私もほっとした。ここに和平終戦へ向けた鈴木・平沼派の提携が成った。美濃部氏が、迫水久常氏と首尾よく連絡が取れて、何らかの協議ないし合意がなされたに違いなかつ

た。「大願」への第一歩が印されたわけですね。

—— 同盟グループにおける海野稔氏は、どう記録されるのですか。

山崎 海野さんは重要な場面で、重要な役割を果たした。海野さんは健在だが、本日まで話すことについて了解をとっていない。本日のところは差し控えたい。

—— わかりました。

山崎 私は引きつづき毎日、太田文相と会い、安達から教えてもらった戦局や連合国の情報を伝えるなどして激励し、また美濃部氏とも2日と置かず連絡をとった。一日一日が大事だった。

文部大臣室は私の場合、木戸ご免となっていた。1945年7月半ば、例によってずっと大臣室に入ると、太田さんはいつになく興奮した面持ちだった。太田さんは、私に「実は先ほどいきなり憲兵中佐がやって来て、どこかで和平の策動をやっている気配がする。この重大時局にとんでもない奴だ。そんな奴は一刀両断にしてやる、と抜刀して振り回した。まあ、まあと中佐をなだめてお引き取りを願ったばかりだ」と言った。

このことも紹介しよう。太田文相は、終戦和平に関して実現を決意しながらも、さらにその先を読んで懸念されていた様子だった。これは太田さんのみならず、保守支配層が全体として懸念する問題でもありましたね。

—— 「国体護持」のことでしょうか。

山崎 そうです。1945年7月5日イギリスで総選挙がなされ、労働党が大勝してアトリー内閣が誕生しました。ヒトラーのナチス・ドイツに勝利して、国民的英雄となったチャーチルの保守党があっけなく敗北したのですね。

アトリー内閣はイギリス政治上、最初の労働党内閣で、炭鉱、電力など基幹産業のみならず、銀行も国有化し、また手厚い社会保障制度を確立した。時代の転換というか、時代が一步

先に進んだ。

私は安達が編集局で毎朝行うレクチャーを聞いて、これを少しアレンジして太田文相に伝えていたが、太田さんが大変興味を示したのがイギリス労働党政権の誕生だった。太田さんは真顔で「戦争が終わると、国民は左傾化するのかね」と感慨を込めて言った。右翼の本流にある彼が、事成ったあとの日本の左旋回に思いをはせるような言い方だった。

現在、鈴木貫太郎首相に対する和平工作のチャンネルがいくつもあったことが判明しています。同盟における私たちのグループの場合、一つは太田文相を介する平沼派を通じて、もう一つは美濃部洋次氏を通じて迫水久常氏や木戸内府の松平秘書官長を通じてなされた。

1945年8月の暦をめくったある日、安達と私は美濃部邸を訪ねた。このとき私たちは美濃部氏から、宮中を含む政権上層部に進展する和平へ向けた有利な情勢にある話を聞いた。安達と私は大変喜び、また美濃部氏に和平の実現に念を入れることを求めた。美濃部さんはうなずき、当日の夜にも「ガソリン車を用意してくれないか」と頼まれ、安達が手配した。

翌晩も、安達と私は美濃部邸を訪ねた。美濃部氏は喜色満面だった。

美濃部さんは私らを応接間に招き入れ、こう言ったのですね。「昨夜はあれから迫水（久常）や松平（康昌）のところを回った。その効あって、今日は首相は決心して御前会議を開くよう陛下に言おうとしたが、言えば陸軍が反対するので困っていると、陛下のほうから会議を開くようのお声がかかり、陸軍も反対できずに会議開催となって、陛下の御意向が諸賢一同にわかった。昨晚の根回しは本当に良かった。お陰さまだ」と顔をほころばせた。

—— それは、ポツダム宣言を受諾した前日、1945年8月13日のことでしょうか。

山崎 そうですね。8月15日正午、私は天皇陛下の「終戦の詔勅」の放送を東京・新橋の第一ホテルのロビーで、同盟調査部の一条、高須、日高の諸氏や、知人の高津正道とともに聴いた。私は放送を聞きながら、ついに事成れりと頬がゆるむのを押さえ切れなかった。

5 政治犯の釈放

旧左翼の消息

山崎 本日のテーマは、当時AFP通信の記者だったロバール・ギランら3人の府中刑務所訪問の経緯、及び徳田球一・志賀義雄など日本共産党の幹部を含む政治犯の釈放となっていますね。

この件について、私はかつて時事通信社OB会の新聞『時事OB会報』（第16号、1982年7月）に「激動の日々を顧みる——時事通信社の誕生前後」と題する一文を寄稿しました。

ところがOB会事務局より、紙幅がないから削ってくれと言われてペラで5、6枚分を削りました。削った箇所は、安達鶴太郎先輩とギラン記者の交遊、また安達がギラン記者を銀座裏の私のアジトに連れてきた経緯などです。本日これを補いたいと思います。

—— よろしくお願ひします。

山崎 私は戦前に3回検挙された。当時、思想犯に対する特高刑事の拷問は凄まじいものだった。だから終戦の和平工作では「憲兵隊に捕まったら命がないだろう」と毎日が祈る思いだった。さいわい憲兵隊に捕われずに8月15日を迎えられた。無事、戦争が終結して緊張が緩んだのでしょね、私は4、5日気が抜けた思いだった。

私が冷静さを取り戻して活動を始めたのは、戦争終結から5日後のことだった。手帳を見ると私は8月20日から25日まで、江森盛彌、藤原

春雄、高津正道、中西伊之助らと相次いで会っています。

1945年8月20日、藤原春雄が、江森盛彌から紹介されたとしてアポなしで会社に訪ねてきた。私は江森とは産労（産業労働調査所）時代からの知己で、藤原とは初めてだった。藤原は、プロレタリア系の短歌会を主宰した左翼文化人で、志賀義雄主筆時代の『アカハタ』編集局長です。

藤原氏の用件ですが、治安維持法事件で有罪になった日本共産党員が現在どこの刑務所に収容されているのか、また誰が、いつ、どこの刑務所で刑期満了となり釈放となったか、釈放された左翼人士は、現在どうしているのか消息を知りたいというものであった。中西伊之助の用件も同じだった。

戦後の日本社会運動を顧みした場合、問題点の一つとして、日本共産党員をはじめかつての左翼の指導者や活動分子の釈放が、戦争終結から2か月近くも引き伸ばされたことがあげられます。

—— その間に旧勢力は「国体護持」の手を打った。

山崎 そうですね。解放運動犠牲者救援会の活動も停止し、日本労農弁護士団も弾圧されて活動の開始も遅れた。これは事実ですね。私が三菱21号館に梨木作次郎弁護士を訪ねたとき、反対に、徳田球一がどこの刑務所に収容されているか知っているかと尋ねられた。司法省の刑政局に尋ねても、どうも厳秘の扱いだったらしく一切教えてくれなかったという。

銀座裏にアジトを設営

山崎 敗戦の時点で、収獄中の共産党員や旧左翼の動静を多少でも知っているとしたら、弁護士事務所か、帝国更新会の関係者、同盟通信社くらいだったと思いますね。同盟をあげる理

由は、左翼前歴者が3、40人は在職していてその交友関係において多少、情報を得ることができた。

けれども入獄中の左翼や収容の刑務所、また出獄した左翼人士に関する情報となると断片的だった。事実、徳田球一が豊多摩刑務所（東京都中野区）に収容されているという江森盛彌らの情報は、実際に違っていた。徳田は、1945年6月の時点で府中刑務所に収容されていたのですね。

だから、私は1945年8月25日に、銀座の裏通りにポツンと焼けないで残っていた芸者置屋の2階の1室20畳の部屋を借りて、これをアジトにして、旧左翼の連絡拠点にした。家賃は月額10円だった。

—— ご自身で借りたのですか。

山崎 そうですよ。終戦時の私の本俸は110円でした。安達の本俸は160円で、ほかに諸手当がついて給与は200円ちょっとだった。飲み屋で俸給袋を見せ合ったから覚えている（笑）。私の本俸は当時としては高給で、家賃10円はなんら負担でなかった。日本社会が猛烈なインフレに見舞われ、闇経済が跋扈するのは1945年10月以降ですよ。

アジトを設営したのは、私自身、戦争が終わっても要視察の対象で、また私が接触する人物もそうで、軽々しく動けなかった。第一、戦争が終わっても治安警察法や治安維持法が存続していたのですよ。思想犯の取り締まりは1945年10月15日に治安維持法が廃止されるまでつづきました。

私のアジトは、かつての左翼が自由に入出入りして情報交換の場となっていました。また収獄中の同志の消息や、日本社会運動の再建を話し合うための場にもなっていた。アジトは有楽町駅や新橋駅に徒歩5、6分の距離にあり、移動も大変便利だった

ギラン記者の手記

当時、AFP通信の極東特派員ロベール・ギラン記者が「徳球を釈放させたのは私だ——府中刑務所での劇的冒険」（『文藝春秋』1955年10月号）と題する手記を發表しています。ギランは手記で、私のアジトに関して「共産主義者を探し出す、私の秘密の探検の旅が、どんな場所から始まったか、諸君にははたして見当がつくかどうか。よろしい。ぶちまけていえば、それは新橋界隈のあるゲイシヤやだった」（111頁）と紹介しています。

ギラン記者の手記は、重要な事実を書いていないし、誤解を招くものとなっています。まず、ギラン記者は安達に案内されて私のアジトに来た事実を書いていない。手記では反対に私らが徳田球一の所在をギランに尋ねたかのように書いています。

—— どんな具合にですか。

山崎 読みますね。「……私が出会ったのは、みすばらしい服を着た男たちだった。痩せた顔、悲しそうな声、それは左翼陣営の人たちで、軍国主義日本の監獄のなかに姿を消した共産黨員たちがまだ生きていとすれば、どうすれば彼らを見付けることができるか、その方法を検討するために、私と連絡をとりに来たのだった」といった具合です（同）。

収獄中の共産党幹部の所在を探しに来たのは、ギラン記者であって、私らがギラン記者に政治犯の所在を聞くためにアジトに招いたのではない。だから「私と連絡をとりに来た」の箇所は、むしろ「私が連絡をとるために（山崎が設営した）アジトに来た」と修正すべきですね。

私は、ギラン記者の手記に2、3事実と相違する箇所がありましたので、訂正を求める手紙を文藝春秋社を通じて送りました。文藝春秋社からも、ギラン記者からも返事がなかった。

私が問題にしたいのは、ギラン記者を私のア

ジトに連れてきたのは安達であって、だが安達のことには一切触れていないことです。ギラン記者は「府中組」の釈放をもって名声を得た。けれども私らの情報提供——とくに藤原春雄の情報提供がなければ、ギラン記者自身、府中刑務所への直行も、徳田球一・志賀義雄ら日本共産党の幹部の「発見」もなかった。

ギラン記者と安達鶴太郎

山崎 先に結論的なことを申し上げますね。もし安達がギラン記者を私のアジトに連れて来なければ「府中組」の救出も、1945年10月4日、GHQにおける政治犯釈放の指令が出なかったかもしれない。その結果、ギラン自身が「手記」に書いておられますが、日本共産党の幹部が抹殺される可能性も実際にあったでしょう。だからギラン記者に対してと同様に、安達に対しても評価しなければならぬ。

—— 「左翼が抹殺される可能性」？

山崎 ええ。ギラン記者自身「手記」で「(1944年)五月(実際は6月12日)、思想犯でつかまった有名な哲学者で批評家の三木教授が獄中で死んだそうだ。それに知名の左翼主義者の戸坂潤も死んだ。やはり刑務所で。こうしたことがつゞけば、いまに共産党員たちも死んだと知らされるだろう。そのうちで一番最初は徳田だろう」(112頁)と書いていますね。

要するに獄中の政治犯について、徳田であれ誰であれ、官憲が病死その他の理由でもって抹殺することも考えられた。実際、先年の東ヨーロッパの民主革命に見るように、反動派の体制が崩壊する過程ではありうることなのです。

—— ギラン記者と安達鶴太郎氏はどのような関係だったのですか。

山崎 記者仲間です。ギランは、日中戦争期の1937年にアヴァス通信社（AFP通信の前身）の極東特派員として来日し、東京を拠点に上海

や北京を往来したアジア通の記者です。『アジア特電・1937年～1985年——過激なる極東』（矢島翠訳、毎日新聞社、1986年）という著書がありますね。

ギラン記者は、同盟通信社では安達や井上勇氏と交遊し、昵懇の間柄となっていた。井上氏とは共著『第三の大国・日本』（朝日新聞社、1969年）があります。

当時ギラン記者は、日本に一番長く滞在した外人記者として知られ、外国人記者会を代表する存在でした。ギランは戦争末期の1945年に「交戦国の記者」として、当局より軽井沢（長野県）の宿泊施設に拘束されていたが、敗戦で自由の身となり東京に戻ってきた。

ギラン記者は戦後、日本の状況——広島・長崎の原爆被害、復活メーデー、食糧デモなどに主に社会記事や、国・共内戦に関する鋭い中国情報を送信して活躍していたが、彼自身、個人的な思いで調べたいことがあった。それはヴケリッチ（Branko Vukelic）の消息だった。

ギランとユーゴスラビア人のヴケリッチは、フランスのアヴァス通信社の同僚で、東京支局で仕事を共にしていた。東京支局ではヴケリッチのほうが赴任は早い。ご存知の通りヴケリッチはゾルゲ事件に連座して検挙され、無期懲役刑となった。ギラン記者はヴケリッチが検挙され、服役していることまでは承知していたのですね。

ところがヴケリッチは、裁判で無期懲役となり、巣鴨の東京拘置所から網走刑務所に移され、1945年1月13日、急性肺炎で死去していた。ギラン記者は同年8月に拘禁が解かれ、軽井沢から帰京して記者生活に戻ったが、当初はヴケリッチの死去を知らなかった。

ギランは、ヴケリッチの死去の確認に多少手間取ったようです。けれども遺族や住居もわかって、日本人の奥さん＝淑子夫人を訪ねてお

見舞いをされたということでした。安達から聞きましたが、ヴケリッチは同盟通信にも出入りしていたのですよ。

銀座裏のアジト——旧左翼との交流

山崎 私がアジトを設置すると、藤原春雄、服部麦生、江森盛彌、高津正道はもちろん、伊藤憲一、小堀甚二、保坂浩明、紺野与次郎、平林たい子、高橋勝之、熊谷次郎、また有賀新、木内誉治なども集まった。

—— 椎野悦朗さんはアジトに来ましたか。

山崎 私はアジトで会っていない。日中は仕事がありますからね。私がない間に来たかもしれない。私自身、椎野さんとは「府中組」が釈放されたのち宿舎としていた、司法省矯正局の宿泊施設・自立会館（東京・国分寺町）で会っています。

とにかく私のアジトは毎日毎晩、連絡が取れたかつての左翼がわんさと集うようになった。みな久々に対面して無事を喜んだ。

左翼人士の交流のなかで一番に話題となったのは、戦争が終わっても釈放されない政治犯、なかでも徳田球一、志賀義雄らが一体どこの刑務所に入っているのか、彼らは無事かどうか、どうすれば救出できるかという話だった。

—— 同盟通信社に、政治犯に関する情報は入らなかったのですか。

山崎 1945年10月4日、GHQの「人権指令」が出るまでは基本的に、入ってこなかった。編集局では毎朝定時に、内信と外信の各部で重要ニュースに関する報告や概況が説明されますが、政治犯の所在や釈放に関して担当者から説明を受けた記憶はない。

政治犯について、日本政府が情報を秘匿し、緘口令を敷いていたことは確かだと思いますね。とにかく政治犯に関する情報は、GHQの「人権指令」以前はほとんどなかったと思う。

私は『毎日』の社会部長だった森正蔵さんと面識があり、徳田球一らの所在に関して尋ねましたが、森さんも知らなかった。

—— 森正蔵氏は『旋風二十年——解禁昭和裏面史』（鱒書房、1946年）の著者ですね。

山崎 そうです。上下2冊のあの本は名著ですね。ベストセラー並みに売れて相当な印税が入ったという。森さんの印税は飲み代やつけの支払いに消えたといえます。安達から聞きました。森さんと安達は付き合っていました。

合わせてこの点も紹介します。政治犯の釈放問題について、新聞紙で当時一番詳しく報道したのは『毎日』でした。三木清の獄死に関する記事にしろ、「人権指令」に関する解説にしろ、また政治犯の釈放に関する記事は、件数でも内容でも他紙を圧していましたね。

ギラン記者のアジト訪問

山崎 これより先、ギラン記者は、ヴケリッチが厳寒期の網走刑務所で亡くなったことを知ってショックを受け、沈んでいたという。同盟に出入りする外国人記者で、頻度はギラン記者が一番でしたが、ピタッと来なくなったという。淑子夫人に重ねてお見舞いをしていたのでしようね。

ある日、ギラン記者が同盟にやってきて、安達に「誰か左翼の連中に会いたい」と申し出て、私が呼ばれた。私の記憶では1945年9月初旬、もしかしたら中旬だったかもしれない。ギラン記者との面談は、私の「手帳」に書かれていないのです。私は安達に、アジトの設営や左翼の連中が参集していることを逐一報告していた。

ギラン記者によれば、政治犯の収獄について、GHQ民政局に問い合わせても返答がなく困っているということだった。司法省の刑政局からも返答がなく「政治犯などいない」ともいわれたと言っていましたね。司法省の対応は私に対し

てと同じだったわけですね。

私がギラン記者と会ったのはその時が初めてです。私は早速、高津正道と藤原春雄に連絡した。2人は「願ってもないことだ」と了解した。

—— ギラン記者はいつ、アジトに来たのですか。

山崎 ギラン記者の来訪は9月27日だったと思う。天皇がGHQにマッカーサー将軍を訪ねた日と記憶する。当日は、ギラン記者と安達と一緒にやって来た。夕刻近かった。質疑はギラン記者が英語で質問し、これを安達が通訳する形式ですすんだ。

質問に対する返事は、高津が仕切るような形でおこなわれた。これは『時事OB会報』にも書きましたけれども、高津は「今日、ここでおこなわれているような左翼の集まりは氷山の一角で、全国いたるところでこうした集まりや動きがある」と話した。

—— ギラン記者は何と？

山崎 「イエス、イエス」と繰り返していた。通訳をしていた安達とも顔を合わせてうなずいていた。このあとですよ、ギラン記者のあの端正な顔が崩れ、眼光が鋭くなったのは。

—— どういうことですか。

山崎 高津により、戦争中に刑期満了となって釈放された左翼の動静が説明された。そして、高津は「現在なお獄中にある政治犯を救出したいものだ」と言って話が終わった。一同これにうなずいた。拍手も出た。

代わって藤原春雄が立って「徳田球一ら日本共産党の幹部10数人が、刑期満了となっても府中刑務所に拘禁されている。面接もはなはだ困難だ。なんとか救出したい。ギラン記者にも協力をお願いしたい」と話をむすび、ギラン記者と握手した。

「府中組」の釈放

山崎 数日後のことですね。1945年10月1日に、ギラン記者らは周到な準備をへて、府中刑務所に乗り込んだ。乗り込むさい、アメリカ占領軍の将校用の軍服を着て軍用ジープで乗り込み、何かGHQの大物の将校がやって来たかのようにふるまったそうですね。同道したのは、同僚のJ. マルキユース記者（AFP通信極東支配人）、米『ニューズ・ウィーク』誌の東京特派員ハロルド・R. アイザック記者です。

この間、あなたから取材したいという連絡を受けて、私なりに関連する本を読み、記憶と照らし合わせてメモをとっておりました。ほかに文献があるかもしれませんが、現在のところ政治犯の釈放をテーマにした研究においては、竹前栄治著『占領戦後史——対日管理政策の全容』（双柿社、1980年）が一番詳しいです。

—— そう思います。当事者の証言も『獄中の刑務所——豊多摩刑務所』（豊多摩（中野）刑務所を記録する会編、青木書店、1986年）くらいしか出ていないですね。

山崎 そう、公刊された記録は少ない。ギラン記者はジープで府中刑務所に乗り付け、看守の抵抗をはねつけて「徳田はいるか、志賀はいるか」と大声をあげながら各房を回り、東京予防拘禁所の棟にいた徳田ら日本共産党の幹部連中と会って彼らと会見した。

ギラン記者の、徳田球一ら日本共産党幹部の政治犯との会見録は、翌日及び翌々日に「特電」で世界に送信され、アメリカの国務省はもちろん世界の民主人士がショックを受けた。プレスのもつ威力、あるいはメディアの衝撃力と言ってもよいでしょう。

このギラン記者のスクープがきっかけで、GHQにおいて初めて政治犯に関する問題の重要性が理解され、釈放のため、日本政府に対して「人権指令」の覚書が発せられた。一方覚書に

対して山崎巖内相は「治安維持法を存続する」旨の談話を発表し、これに対してマッカーサー司令部は山崎内相の罷免を要求、東久邇内閣は進退が窮まって総辞職した。

—— この結果、1945年10月10日の「府中組」の解放や、全国の刑務所における政治犯の釈放が実現した。

山崎 そうです。この点はギラン記者の功績でしょう。日本社会運動はこれにより再出発し、GHQの民主化政策の展開もあって怒涛のごとく進展した。

政治犯釈放に関する問題点

山崎 政治犯の釈放の経緯を顧みて、まとめとして、次の点を申しあげて終わりにしたい。まず、先ほども述べましたが戦争が終わってもかつての左翼も国民もすぐに動けなかったという問題があります。治安警察法、治安維持法など明治以来の弾圧法規が撤廃されずに残っていた。特高警察機構も存続していて、旧左翼や思想前歴者の尾行や内偵がつづけられていた。国民は動ける状況になかった。

われわれも行動に躊躇した。私はアジトで得た、政治犯に関する重要情報をたいてい安達に報告していたが、安達は私に「とにかく慎重にやれ」ということであった。特高刑事に追われたかつての左翼にとっては、見えざる力が働いてブレーキが利いていた感じでした。

政治犯の釈放が遅れた理由として、左翼に内在する問題もあったと思いますね。戦時中に出獄したかつての左翼はたいてい転向者で、また「転向書」を書かなければ出獄できない事情にあった。このことが微妙に、先に出獄した左翼

に影響を与えていたと思いますね。

—— どのような影響ですか。

山崎 転向を拒否して獄中でなお闘う同志の存在、いわゆる「獄中18年」組とか「獄中16年」組に対する畏敬にも近い感情があり、他方で自らは「転向」したという負い目があったと思う。だから自らが決起するというよりは、絶対的指導者の解放ないし救出を待って、彼らの指導のもとに日本社会運動を再建するという待ちの姿勢があったと思いますね。

かつての左翼は、徳田・志賀ら「府中組」の解放や、解放後における彼らの指導を待つ姿勢となっていて、敗戦の時点において自らが戦争と抑圧に対して決起するばねを持ちえていなかった。この待ちというか、待機のスタンスがかえって政治犯の釈放を遅らせたのではないのでしょうか。日本の左翼は、朝鮮人や中国人のように戦争と抑圧に対して決起することはなかった。

とにかく政治犯の解放も日本の民主化もGHQにより「上から」与えられた形で実施された。その政治犯の釈放が10月10日で、日本社会党の結成が戦争終結から2か月半も経た11月1日、日本共産党の再建大会（通算で第5回大会）が12月1日です。左翼の復活と再建はあまりにも遅い。

この間、旧体制は政権居座りを試み、新しい「保守体制」の形成に向けてGHQと取引を重ね、両者の連携が模索された。政治犯の釈放に関して研究するさい、これらの点を問題視して分析を深めて頂きたいと思います。

—— 本日は長時間にわたってのお話、有難うございました。(完)